

Trial & Error

トリアル・アンド・エラー

No.87

試 行 錯 誤



ダナン(ベトナム)の高校生と ©船波恵子

特集 体験・スタディーツアー

座談会	スタディーツアーで学んだこと	2
	スタディーツアー参加心得	8
	JVCスタディーツアーのご案内	10
	NGOとスタディーツアー	12
	アジア民間交流ぐるーぷ(APEX), 曹洞宗ボランティア会(SVA)	
いんたびゅう	MIRC 奥山恵俊さん, 松本彰夫さん	14
	JVCフォトコンテスト	16
シリーズ	NGOを見直す	18
	現場便り	19
アジア民話の旅	ベトナム	20

スタディーツアーで学んだこと

富安光子 柴田紀子 大塚和人

最近少しずつではあるが、アジア、アフリカの国々に関心を持つ人が増えてきた。観光だけではなく、その国の人々と交流できるスタディーツアーのような旅にも人気がある。今回の座談会では、JVCのスタディーツアーに参加した、年齢、経験、訪問地のまったく違う3人の方に、現地で何を見、何を感じたか率直に語っていただいた。「オヤッ」と思うこと、「フーン」とうなずくことがあるかもしれない。なお司会は編集部のA・Gが担当した。

予備知識は少ない方が感動も大きい

司会 富安さんはタイ、柴田さんはカンブチア、大塚さんはエチオピアと、皆さん場所は違いますが、スタディーツアーに参加して楽しかったですか？（皆うなずく）それでは、楽しかった点から教えてください。それでは一番最近の柴田さんから。

柴田 私たちのグループは、お医者さんとか、看護婦とか保健婦さんとか、医療関係者だけでした。私自身は看護婦です。ラインセンターの開所式に出席することが主な目的だったんですが、いろんなレベルの医療施設を見ることができました。クリニックから、郡のレベル、国のレベル……。

日本の病院からでは、想像が付かないでしょう。どういう疾患を持った人が来てて、どういう治療をしてて、どういう設備があるのか。それを見ることができて良かったと思います。

司会 どんなところが一番違っていました？

柴田 きれいなお水とか、予防接種とか、予防的なことをやっていけば、もっと健康状態がよくなると感じました。

司会 日本とはどんなところが違っていました？

柴田 日本には少なくなった、下痢、赤痢、コレラなどの基本的な感染症がまだ多いですね。子どもたちも弱いから死亡率も高いですし……。あと、結核とか、そんな病気も。

司会 富安さんは？

富安 面白かったと言うより、私はただびっくりして。最初にね、リーダーの（岩崎）美佐子さんから“あまり知らないほうがいい、初めて見て感動したほうがいい”と言われて。怠け者だし、勉強しないで行ったの。だから、何見ても驚きだったですね、知らなかったから。

司会 特にどんなことが？

富安 ショックだったのは、サイト2というキャンプに行ったときね。足のない人とかいっぱいいたでしょう。あと、子どもがいっぱいいて、お腹の大きい人がいっぱいいて、それで、“一生このキャンプで暮らさなきゃならないんじゃないかなあ”なんて。あれがどうしようもなかった。

司会 大塚さんはいかがでした？

大塚 海外へ出る、飛行機に乗るということ自体が初めてで、初めて行った外国がエチオピアというのは、そーいもないんじゃないかって思っているんですが……。

で、報告書に書いたり、繰り返し話していることですが、ツアーに参加するとき、日本のなかの自分の生活というのがすごく嫌でした。日本は表面上はすごく豊かだけど、本当はすごく脆い、そんな嘘で固めた世界に住んでるのは嫌だ、全然違うところに行きたい、そんな気持ちでいたんです、行く前は。

それが行ってみたら、すごく雨に恵まれた雨期で



富安光子

JVCの星野事務局長の同級生。子育てを終え、東京事務所のボランティアを始めてもう5年。1987年2月タイツアー（難民キャンプ、東北部の農村、バンコクのスラムなど）に参加。



柴田紀子

1980年代初期に、難民流出期のタイ、カンブチア国境で活動。帰国後看護学校に進み、現在小児病院看護婦。1988年9月カンブチアツアー（各種医療施設、ラインセンターの開所式など）に参加。



大塚和人

東京都の公立中学校の国語科教員。劇団JVC、楽団JVCのメンバーにして、空手の達人。1988年8月エチオピアツアー（マーシャ村での植林、母子保健など）に参加。

しょう。アフリカのイメージとはまるで違って、緑の大地に覆われていたし、見ようによっては箱根の風景のように見えてしまうところもありました。アフリカにきたという感じがなくて。もちろん、ワーッと地平線が広がっているところで、車がエンコしたようなときには、大地と空の広さとか実感しましたが。

でもツアーに行ってる最中には、強いカルチャーショックとか、あまりなかったんです。かえてギャップのなさのほうを強く感じて。

帰ってきてから、自分でも意外だったんですけど、日常知ってるはずの自分の生活に帰ってきたときに、日本のモノとエチオピアで見てきた人とか風景とかが二重写しに重なって見えてきました。そのときに、いろんなことが、頭のなかとか、胸のなかとかに浮かんできて……。

司会 富安さんは全然違うところに行ったという印象ですし、大塚さんは反対だし、柴田さんはそのへんはいかがですか？

柴田 私は前にキャンプにいたんです。すごい古い話で、80年ごろ、カオイダンにいました。だから国境側からしかカンブチアを想像できなかったのが、今度はこちら側に入れたということが、すごくうれしかったですね。空港にプロペラ機が着いたときに、なんか……。

司会 行く前の話に戻るんですが、富安さんは予備知識なしで……。

富安 事前研修は2日ありましたからね。どうい

ふうにして難民が出てきたとか、岩崎さんや熊岡さんにね、みっちり。でも、現場がどうかということにはなかったですね。キャンプの背景とかそういう話ばかりだったです。

司会 予備知識はあったほうがいいのかしら？

富安 私はねえ、何にも知らないで行ってよかったと思う。あんまり予備知識を仕入れていくと確めに行くようなもんじゃないかなあ。

柴田 ああ、そうね。

富安 現実是这样で、自分の知識と照らし合わせるとしかしくって。

司会 柴田さんは、専門家で予備知識十分という感じですが……。

柴田 私も基本的には、予備知識はないほうがいいと思うけど……。ただ、深く知っていれば、それと比較して、さらに考え合わせることができるかもしれない……。

大塚 ぼくもだいたい、お二方と同じ意見なんですけど。漠然としたイメージとか、ほのかな憧れぐらゐに留めておいたほうがいいんじゃないかと。

司会 大塚さんからは、先ほどなぜ行きたいと思ったかということはお聞きましたが、柴田さんと、富安さんはどうして参加されたのですか？

柴田 国境から帰ってきて、学校と仕事でものすごく忙しかったので、カンブチアとかJVC関係はこちへ置いておいたわけです。やっと仕事だけの生活になって暇ができたので、なにかまた、こういう関係にとっかかりを持ちたいと思っていたので……。

そこへ話が来たので捕まったというか。

司会 富安さんは、いかがですか？

富安 JVCに関わって3年ぐらいたってましたかねえ。みんな、顔馴染みの人がね、行っているところはどんな所なんだろう、って。どうしても見てみたいという気持ちがありましたね。

司会 多少周囲の抵抗はありませんでした？オレを置いていくのかとか。

富安 一番の難題がそれでしたよ。主婦がね、2週間うちを空けるというのは大変なの。“いってらっしゃい”も“おかえりなさい”もなかったです（おおいにウケル）。こそこそと、目をつぶって出ちゃったの。でも、2週間が限界だったみたい。

司会 柴田さんは職場は楽に休めたのですか？

柴田 とんでもなかったです。

富安 やっぱりねえ。

柴田 1年目だったから。4月に入って、9月の末です。新人でこんな十日も休みを取った人は、もう初めてって、すぐ言われました。でも、たまたま、9月と10月と月がまたいだので休みが取れました。1カ月のなかにすっぽり十何日も入ると完璧にだめだったんですが。その月の当直回数とかに影響しなかったのね。それは、ラッキーでした。

まわりにも、観光じゃあなくて、こういうところに行くんだと根回しをしました。自然に、まあしようがないんじゃない、って思わせるように。当直で一緒になったときに一人ずつ話をしました。とにかく1週間以上休みを貰うというのは、ミーティングで、みんなのOKを貰わないとだめなんです。

ごちそうは全部食べてはいけない

司会 旅行というと食事とシモの話にしたがるのは悪いくせですが（笑）、いかがでした？

富安 食べものは屋台ばかりでしたよ。鍋がたくさん並んでいる……。

司会 豚の角煮のようなのをご飯にかける……。

富安 ええ、安くて美味しい……。

柴田 ああ食べたい、食べたい。

富安 農家に泊まったでしょう。高床式というの。水牛とか豚とかいる板敷きの上に寝て。電気もガスもないから、日が暮れりゃあ寝て、夜が明けりゃあ起きるという感じでね。

農村では3軒くらいに分宿したんですがね、こちらで食べもの、材料は持っていったんですよ。そう

いう材料を使って、そこの奥さんが一生懸命料理してくれるんです。餅米をザルみたいので蒸かして食べるの。美味しくてね。

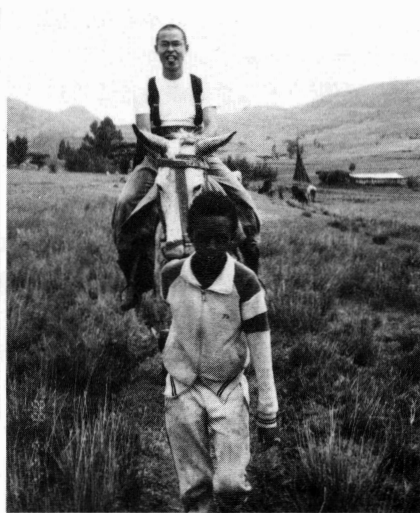
お客さんの残したものを食べようという人たちがいるのね。親戚の人たちが大勢いるんです。だからお腹が空いていたって、あんまり一生懸命全部食べちゃいけないんだって思って。

で、珍しいもの着てるでしょう。男性だって巻き付けたものとか。写真撮ろうと思うと、急いでうちのなかに入ってね、ナイロンの、化学繊維のシャツとかに着替えてくるの。お金を出して買ったものだから、上等なのね。どこのうちにも機織りがあって、自家製のものを着ているわけだけど……。外から行



▲写真を撮ろうとするとシャツに着替えちゃうのね

エチオピアの子供たちが幸せになってほしいと思うように、▶
日本の子供にも幸せになってほしい



った私たちにはそれが珍しいでしょう。いいと思えるのに、化学繊維のものを着て、直立不動になっちゃう。

柴田 それが一番ドレスアップしたものと思うのね。

富安 そうそう。撮られるんなら立派な着物を着てという感じ。

司会 しかし、持っていった卵なんか、ご馳走なんですよ。

富安 そうですね。でもね、村の人ってすごい贅沢だと思ったんですよ。全部自給なんですよ。お米はもちろん、その辺になっているの、バナナとか。

柴田 カンプチアでも、鶏とか豚がその辺にいるから、東京で食べるものとは全然おいしさが違う。

富安 もう、あれはね、最高の贅沢だと思ったわ。自分で作って、自分で食べるんだもの。作らなくてもなってんだもの。それに、繭がたくさんありましたよ。普通に絹を着ているんですよ。

司会 ヘーエ。カンプチアの料理はいかがでした？

柴田 基本的にはタイと同じですが、おいしかったですよ。

司会 エチオピアはいかがですか？

大塚 主食のインジェラは、スポンジ状の薄い布かホットケーキみたいなもので、その上に、辛いシチューを乗けて、端のほうから千切ってくるんで食べるんですが……。あれ、最初は珍しいから、喜んで食べてたんですけど、そればかりで1年間となるときつい感じがしました。

ホテルとか道すがら、小さいレストランなんかで食事することが多かったんですけど、そのかけるシチューの具によって種類が別れています。現地の普通の人は肉なんか年に一、二回だという話を聞きながら、僕らは肉入りのヤツをもっぱら食べてたんで

すけどね。ツアーの終わりごろに、エチオピア人の何年分肉を食べちゃったんだろうって、話しました。

マーシャ村のJVCの宿舎では、向こうで作っている日本食にありつけたんで、ホッとしました。

司会 本当の和食なの？

大塚 ええ。味噌なんかも作っているし、エチオピア人の女性に作り方を教えて。味噌汁でしょう、ご飯でしょう……。オシンコミみたいなものも。

富安 伊藤幸子さんが全部指導したのよね。

大塚 卵そのものがおいしかったということもありました。

司会 エチオピアのツアーの報告書を読んで面白かったことのひとつは、トイレの話なんだよね。女の人が、昼間は外でやるのはいやだけど、夜に星を見ながらやるのは気持ちがいいというのがあったんだけれど……。

大塚 実はまだ報告書製本しておらんのですよ。それぞれに、製本前の状態でどっと渡されているんですよ。折りまげて製本するのは各自の仕事で、怠け者はやとらんです。

司会 あなた自身は？

大塚 向こうの人が、あとの処理に石ころを使うと聞いたときは……。彼らは長いマントをはしょっているでしょう。だから女の人でも道端で安全に、用が足せるということで、家庭訪問をしたとき、いっしょに行ったお母さんが道端でしゃがんでということはありません。

マーシャでは危険だという宿舎のトイレで。雨期で降りすぎちゃったでしょう。床のすぐ下まで水がきてて。しかも、床自体がたわんでいるような状態で、恐いんです。床が抜けたら水泳だということなんです(笑い)。

日本の生活、日本の子供たちを大切にしたい

司会 さて、スタディーツアーの成果というか、帰ってきたあとの話ですが。先ほど大塚さんが、帰国後の話をしてくれましたけれど……。

大塚 悲惨なもの、異常なものを期待して出かけた旅行で見たものが、自分の生活とギャップのない普通の生活だったというのが、帰ってきてからじわじわ効いてきました。行く前は子どもたちに対しても、給食を食い散らしたり、パンで遊んだりする姿を見て、ある意味では、憎しみを感じるようなところがあったんですよ。

いまエチオピアの子どもたちの姿をよく思い出んですけど、町の子、羊を追っている牧童の子、高級ホテルで見かけたお金持ちの子、いろんな子どもがそれぞれの生活を暮らしている。そのとなりに日本の子の日本の子らしい生活があって、いいんじゃないでしょうか。

いい生活と悪い生活、幸福な生活と不幸な生活、そういう上下関係があるのではなくて、人間の暮らしというのは、ひとつひとつ同じ高さに並んでいてそのどれもが尊い。だから日本の子どもたちにも、

しなくちゃいけないことはあるんだけど、日本の生活があっという間、それが全部の出発点であると、感じはじめたのです。そのごく普通の生活こそが、一番大事にしなくちゃいけないんだとも。

司会 それは授業を充実させなければ、なんて気持ちに結びつくのですか？

大塚 いや、もっとそれ以前の事です。どの子を見ても、もう、可愛く見えちゃって。教員として変わったということは、そういうことですね。エチオピアに行く前には、ただ喧しい鳥合の衆、群れでしかなかったものが、帰ってきてからは一人一人の顔が見えます。

司会 柴田さんは行って変わったこと、ありますか？

柴田 今、JVCでやっている人、行ってる人を羨ましいと思いつつ、埋没したような感じで生活していたんです。で出てみて、やっぱり、向こうでの生活が捨てがたいんです。たとえば、日本のなかにおいて月給を貰って暮らしていけば、俗にいう幸せな生活はできるかもしれないけれど、なんかそれじゃあ嫌だ、忘れたくない、って感じました。

司会 どうして忘れたくないと感じるのかしら？

柴田 そっちのほうが幸せのような……。前にキャンプにいたときのことが、自分のなかに、ずっとあるんだという気がするのね。私、タイ人と一緒にいると、すごく幸せなんです。気を張らなくていいし。

日本人同士というのは慣れるまで時間がかかるでしょう。タイの人なんか、壁がないというか、人間同士がすごく近いし、いつも近くに寄り添って生きている。その集団のなかに入るのも楽だし、入ってしまえば気が楽というか、すごく幸せになれるの。頑張らなくてもいい。受け入れるベースも大きい気がするんだけど。

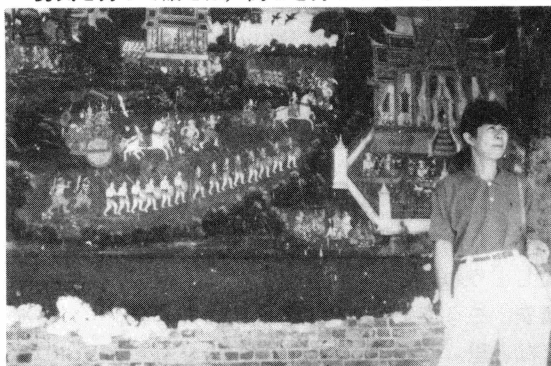
自分にもし役に立つことがあって、一緒にやっていたら、幸せだなと。

司会 帰って4～5カ月経ってどうですか？

柴田 特に変化はないんだけど、いま自分の目の前にいる子どもたち、小児病院ですけど、ものすごく薬も使えるし、治療食もできるし、なんでもできちゃうんですね。可愛い子どもが入院してきているから、親も愛情いっぱい、おもちゃでも何でもスゴイんです。前はね、そういう子が痛がって泣いたりするとね、どっかにもっと頑張らなさいと、少し冷やかに見ていたんです。

それが帰ってきて、片や、ビタミンが少し足りな

勇気を持って話せば、関心を持ってくれる人もいます。



くて失明したり、食べ物がなくて成長発達ができない子がいるんだから、ちゃんと食べなさいもっと頑張らなさい、という気持ちもたまにありますが。だけど、まず自分の目の前の子を、もっと大事にしなくちゃいけないんじゃないかなあ、そんな気もするんです。

司会 しかし不思議だなあ。普通の人って、逆のイメージじゃないのかな。エチオピアやカンパチアに行くとか、その子どもたちのことが気になって、いまの日本の子たちに批判的になるというか……。

大塚 どうしてなんだろう。反対なんですね、たしかに。

柴田 絶対、頭のなかではね、そういう貧しい子どもが優先なの、今でも。だけどあまりにも今までの自分というのが、そっちばかり考えすぎてたかな、という気持ちがあるかもしれない。

大塚 エチオピアに行く前、頭でしかアフリカのイメージしかないときには、パンを粗末にしている子を見たらきつく叱っていたんですね。パン一切れでも別の所にあれば、一人が1日生き延びれるかもしれないんだと。

でも、エチオピアの植林サイトを訪ねたとき、案内してくれた少年が、弁当を食べたあと、食べかけのレモンかなんかを、ポイッと捨てたんです。それを見て、アフリカの子が食べ物を捨てるなんてありえないことだと思っていた自分はショックだったんです。

頭でだけ考えていると極端に走っちゃうけれど、基本的には人間というのは皆同じで、置かれている環境によって習慣が違ったり、生活が違ったりしてくる。エチオピアの子どもたちが幸せになってほしいと思うのなら、日本の子どもたちだって幸せになってほしい、そう考えることに何の矛盾もなくなってしまう。

司会 なるほど……。

大塚 少し表面的すぎる解説ですが。

司会 富安さんはいらっしゃる前と後では、いかがですか？

富安 ええ、だいぶ経ってからね、スタッフの人に変わったって言われたの。自分では意識してなかったんだけど。それまでの私って、なんかオジオジしてたのね、ここに入出入りするの。根がないような、物好きで来ているような……。でもあれから、ここでの自分の存在理由がはっきりしたような気がして、自信が出てきたと思うの。私自身がここにいていいんだな、これをやってていいんだなって。

司会 分かるような気もするんですが、もう少し。

富安 JVCの活動内容も漠然としか分からないけれど、私の力でできるのはこれだなんて思うことをやっていると……。

大塚 私も同感です。ツアーに行く前は、JVCのオ

フィスはなにか敷居が高いようなところがあったんです。なにか頼まれたことでもなければ、来ちゃあいけないような。

富安 押し掛けじゃあないか、そういう気持ちがあってみんなに邪魔になっているようなら、すぐに身を引こうとかハスに構えてきてたのね。今はね、私はこれをやってればいいんだと思えるの。

司会 ウーン、行かないとよく分からないのかな。

大塚 ちょっとニュアンスが違っちゃうかもしれないけれど、このオフィスがどういうドでかい現場とつながっているかが、分かったということもひとつの理由だと思いますけれど。

富安 そうね。皆それぞれ所を得て、現場で働いているでしょう。だから私の現場はここだという、感じね。

大塚 そう。

チャンスがあったら行ってみよう

司会 さて最後になりますが、T&Eの読者はスターディーツアーには行ったほうがいいのかしら？

柴田 その前に、ツアーに行くというのは現地の人に負担にならないのかしら。毎日の活動で忙しいはずなのに。

司会 現地での活動歴の長い、熊岡さんなんか企画しているんだから、そんなに気にしないでいいんじゃないですか。

大塚 個人的主観的になって申し訳ないんですが、エチオピアに行かなかった人生って、考えられません。生活も意識もガラッと変わってしまったんで、チャンスがあれば行ってみて損はないと信じます。

富安 ある程度意識をもった人なら、おすすめしたいけど、絶対に観光ではないから。チラッとでも観光の気持ちがあれば、おすすめじゃないわねえ。

柴田 行きたい気持ちが少しあって、迷っている人がいたら、思い切って飛び込んでみたほうがいいと思いますね。自分自身だけでなく、自分の経験を話すことで、それまで関心をもっていなかったまわりの人たちも、興味をもってくれる人が生まれるかもしれないし……。

司会 その点教員って、いい仕事ですね。

大塚 まあ、そうです。参加資格のひとつに、“個人的な経験に留めずに、なんらかの形で社会にフィードバックできること”というのがあって、それがすごくプレッシャーに感じましたが。参加前はショボク教員でしたからね。今はしゃべるわ、書くわです

が……(笑い)。

司会 柴田さんは？

柴田 昔、やたら、まわりの人にしゃべりまくったというか、そういうことがあったんです。見てきたものを知ってほしい、そんな平和に暮らしてる場合じゃないんだ、もっと振り返ってよ、みたいな感じがあって。そのときは一生懸命話してはいるつもりでも、まわりの人には、ただの押し付けにすぎなかったと、今は思うんです。

だから、第三世界の話を話すのは恐くて、口を閉ざしていた時期が何年かあるんです。

今回、恐かったんだけど、休みを貰うためにはしようがなくって、言っちゃったわけですよ。それで帰ってきて、スライド上映なんかしたい気持ちもあるんだけど、そこまですると……。で、写真集にして簡単に経過を書いて、休憩室に興味がある人は読んでくださいと置いていたんです。

そしたら、結構それを読んでくれて、そのあと個人的に話を聞いてくれたりとか、医療関係者が外に出ていっている現状を知りたいと言う人も何人か現われたし……。ホッとしているというか、今まで、私、日本人に期待しないようなところがあったんだけど、なんか自分のことばかり考えて生活していると……。こっちから、ちょっとたたけば、反応してくれるということに、うれしさを感じています。

司会 長い間、ありがとうございました。へたくそな司会ですみませんでした。

スタディーツアー参加心得

日本人にとって、旅は昔から馴染み深いものである。物見遊山や〇〇詣でと、ことあるごとに繰り出してきた。たいていは親しい者どうしで連れ立って、珍しい風物を愛で、宴を開き、市をひやかしたと思われるが、その土地その土地の人たちとの出会いの旅というものはあまりなかったようだ。実際、旅とある土地を通り過ぎることであり、出会いを望むのは難しい。

しかし、JVC スタディーツアーが目指すのは、参加者とその土地の人たちの出会いである。都市で、農村で、3等列車の中で、食堂で、いろいろな人との出会いがある。そんな出会いが楽しく重ねられたら、旅は大成功である。

(1) 教えるより学ぶ

友だちになろうとすると、たいていは言葉の壁に阻まれる。そこで、村で過ごす夜には日本の歌を歌ったりして、言葉を越えて触れ合おうと一生懸命になる。歌い始めると、やめ方がわからなくていつまでも続けることになる。ところが、冷静に観察すると村の人たちの表情がいまひとつ冴えないことに気づく。知らない歌に退屈しているのだ。これが日本の歌ではなく、タイ民謡だと目の輝きが俄然違ってくる。ラムボン（踊り）も始まる。だからといって、私たちがいきなりタイ民謡を覚えるのは難しい。なにも自分でパフォーマンスしなくてもいいのだから、そんなときはおじちゃんやおばちゃんをおだてればいい。喉が自慢の人が出てきて、ラムボンの輪ができ、みんなが踊り方を教えてくれる。

折り紙やボールを用意してくる人がいる。子供たちと仲よくしようと思えば、折り紙もボールもなかなか役に立つ。サッカーで汗を流せるし、どの子だって初めて折るとは思えないほど折り紙がじょうずにできる。でも、輪ゴムや木の枝、木の葉など、村で手に入る物でうまく遊べれば、もっといい。子供たちがあとから思い出しても同じ遊びができるからだ。

何事に限らず、私たちはつつい教えてあげようとする。せっかく未知のところに行ったのに、好奇心を働かせていない証拠だ。見まわすと、村には習うと楽しそうなことがいっぱいある。繭を煮て絹糸を繰っているおばあさんがいたら、やらせてもら

う。機織り、水汲み、炊事、籠を編むための竹ひご作り、田植え、蛙とり、なんでもやらせてもらってみよう。村の人たちは喜んで教えてくれる。身体を動かせばすぐに仲よくなれる。

(2) 緊張しないでゆったり構える

もっとも、この出会いも履き違えるとひどいことになる。あるとき、「友だちを作ろう」と言う私の言葉を、数で実行に移した女学生がいた。どこでも、誰にでも手当たりしだいに話しかける、名前や住所を聞く、一緒に写真をとる。飛行機の中では偶然乗り合わせていた私の知り合いを捜し出してきた。列車では、全車両のすべての乗客と物売りに声をかけるだけでは気がすまず、ひと駅ひと駅降りて、駅の人にまで声をかけている。これはまあいいとして、国境や検問所で兵隊に話しかけているのには何度か青くなった。「危険だから目立たないよう静かにしていて」と言っておいて、手続を済ませてさてと見まわすと、とんでもないところへ行行って、銃を持った志願兵に話しかけたりしている。

タイでは若い女の子が見知らぬ若い男性に話しかけることはまずない。だからいやでも目立つ。この女学生の行動が起因して、別の女学生が危ない目にあいかけて、私の勘認袋が爆発し、彼女はやっとなしくなった。

短い期間になんらかの成果を上げようという優等生的な発想が、緊張によって輪をかけられた結果の行動のようであった。これほどとまではいなくても、緊張すると体調も崩しやすい。肩の力を抜いて、ゆったりしていることである。

(3) 五感を研ぎ澄ます

乗り物に乗ったらすぐ眠ってしまう人がいる。惜しいなあと思う。窓の外の景色は同じようで少しずつ変わっていく。家の作りも、植生も、栽培作物の種類も。ただの田んぼが続いているだけのようできて、もうほとんど消えてしまったと言われている竜骨水車が動いているのが見えることだってある。大きな木の根本には、神さまの祠がある。アイスクリーム屋さんが、自転車で村をまわっている。見飽きることがない。そしてすぐ見えなくなってしまう。

難民キャンプなど、かたまって行動しなくてはな

として稲の神に感謝を捧げつつ仲間と語る祭祀であり、若い男女の出会いの場でもある。だから、脱穀の機械だけ比べて優劣をつけるなんて、してはいけないしできないことなのだ。

(5) 何でも食べてみよう

その土地の食べ物が食べられない人は、会っただけでもだいたい見当がつく。素直でなく、自分の殻を固くしている人だ。頭から拒否反応を示す人もいれば、食べようとして食べられない人もいる。食べられるようになるのには心を開くしかない。どちらかと言えば食べられないのは圧倒的に男に多い。なかには中華レストランなどでは馬鹿食いするくせ、農家の心尽くしのご飯が食べられないという始末におえないものもいる。食事が楽しめれば、その国の生きた文化を味わえたということだから、旅の目的の半分は達成したということにならないだろうか。

(6) 自然や人と馴染む服装で

スタディーツアーに参加する服装は、さりげなくて、動きやすく、洗濯しやすいのがいい。ジーンズよりは薄手のパンツの方が汗と埃で汚れても、洗うのが楽で乾きやすい。

も肌をたくさん見せるので歓迎されない。半袖シャツやTシャツの腕まくり、これは私も長いあいだ気がつかなかった。そう言われて見回すと、腕まくりしているタイ人はみかけない。

(岩崎美佐子)



JVCスタディーツアーのご案内

ソマリア

難民問題を考える旅

JVCがソマリアで難民定住のプロジェクトに取り組んですでに5年になる。かん木と石ころだらけだった土地にポツンポツンと農場が生まれ、生長の早いシルシナ（イピルイピル）で覆われた用水路は新しいオアシスとなっている。

現在ソマリアには84万人の難民がいる。エチオピアとソマリアのオガデン紛争によってソマリアに逃れてきた人々、現在のエチオピアの社会体制や内戦を嫌ってきた人々がUNHCRやソマリア政府の保護下におかれている。10年もの間こう着状態が続いたソマリア、エチオピア関係も昨年4月の両国の関係改善により難民帰還の道が開かれた。

今回初めて行われるスタディーツアーではまず難民キャンプを訪れる。何年も国連からの食糧配給に依存する人々、その配給トラックを追いかけまわす子供たち、モスク、墓地、市場。難民キャンプは突然砂漠に生まれた巨大な町となっている。JVCが開いた難民定住のための農場も12カ所、200ha以上になった。しかし、長年にわたる人々の営みにより難民キャンプ周辺のかん木は燃料のために伐採され、

環境問題がクローズアップされている。

国連はソマリアの難民に対しこれまで巨額な資金をつぎこんできたが、昨年来難民政策に対し真剣な見直しが行われ、難民の本国帰還とソマリアでの定住自立にさらに力が入られるようになった。今後難民問題はどのような展開をするのだろうか。UNHCRの現地スタッフ、難民や地元民との懇談を交えながら考えたい。

ソマリアの6月は美しい。地表温度が70℃にもなる乾期が厳しいだけに、緑一面のこの季節を人々は持ちこがれるのである。

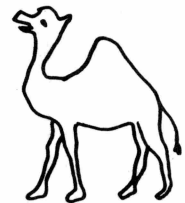
<募集要項>

期 間：1989年6月中旬、約2週間（事前研修を含む）

募集人員：6名前後

参加費用：30万円前後（現在調整中）

募 集：詳しい計画ができ上がる4月から公募
（担当 鍋田）



エチオピア

乾いたテーブル台地を訪ねる

エチオピアは悲惨な飢餓の国なのだろうか？

昨年8月の第1回スタディーツアーに参加した6名の男女の感想によるとどうもそうではないようだ。高低差2000m、片道2日間の4輪駆動車による強行軍の末に彼らが見たのは期待していた飢餓地獄ではなく、ごく普通の村の生活であった。

エチオピアの大雨季は6月から9月。干ばつに襲われた87年とは対照的に、88年の多雨は隣の国スーダンに洪水をもたらした。マーシャ村も雨期には途中の川が増水のため孤立することが多い。8月末に

行われた昨年のツアーは、幸運が重なって予定どおり終了したが、やはりこの時期にエチオピアを訪れるのは危険すぎる。そして、はげ山だらけのマーシャ村が緑に変身してしまうこの時期では、エチオピアが直面している環境の厳しさがわからない。そこで今年度のスタディーツアーは乾期のまっただなかの11月に行くことになった。髪がまっ白になるほどの土ぼこりを浴びる旅、覚悟のある方はぜひ御参加下さい。

<募集要項>

期 間：1989年11月中旬（事前研修を含め12日間）

募集人員：5～6名

参加費用：29万5000円

（往復航空運賃、国外の宿泊費、食費、移動費、事前研修費を含む）

タイ

回を重ねて里帰りの気分

毎年2月、8月と年2回実施しているタイ・スタディーツアーのコースは、このところほとんど変化がない。参加する人たちはたいてい初めてなのだから問題はないのだけれど、引率する側としては毎回同じところに行くよりはいろいろ行ってみたいと考えたこともあった。

ユーカリ植林反対闘争のあった村や、村中で娘、とくに長女を売春婦として出稼ぎに行かせ、数年稼いだら村に帰って幸せに結婚し、生まれた長女をまたまた売春婦として出稼ぎに行かせる村などじっくりと訪問してみたいところがたくさんある。

しかし、10日間の日程で、都市スラム、難民キャンプ及び農村のJVCの活動地訪問は欠かさず、さらに欲張るとなると移動が多くなり、まったくの駆け足旅行となってしまうのでちょっと無理だ。

そんなこんなでコースが固定化してきたと同時にそのよさも出てきた。ホテルのおねえさん、レストランのおばちゃんなどあちこちに顔馴染みが増えてきたのだ。ホテルは特別料金、レストランでは注文しない家庭料理がおまけについてきたりする。ほとんど里帰りの気分だ。

かくして初めての人も回を重ねている私も楽しく東北路に行く。この日数では数あるタイ・ツアーの中で充実度最高と自負しているが、いつか東北路を

タイ・スタディーツアー

日次	月日	研 修 内 容	宿 泊
1	8/17	事前研修(国際救援運動の意義, その他)	モラロジー研究所
2	18	同上(現地活動報告, タイ語講座, 他)	同 上
3	19	出 発	ホテル
4	20	現地オリエンテーション, スラム視察及び市内観光	ホテル
5	21	スラムにおける図書館活動, 奨学金活動の視察	ホテル
6	22	カンボジア国境へ移動(列車で)	ホテル
7	23	難民キャンプ視察	ホテル
8	24	給水事業	ホテル
9	25	視察遺跡見学, 農村ホームステイ(農村の生活体験)	民 泊
10	26	農村の生活体験	民 泊
11	27	バンコクへ移動	ホテル
12	28	タイ国大学生もしくは外国支援団体スタッフとの懇談, その後自由行動	ホテル
13	29	帰国, 成田解散	

* また、出発日・期間・費用は、現地事情で多少変更する場合がありますので、ご容赦ください。

いっしょした人たちを対象に別のコースでもできればいいと考えているが時間的制約で当分無理である。

＜募集要項＞

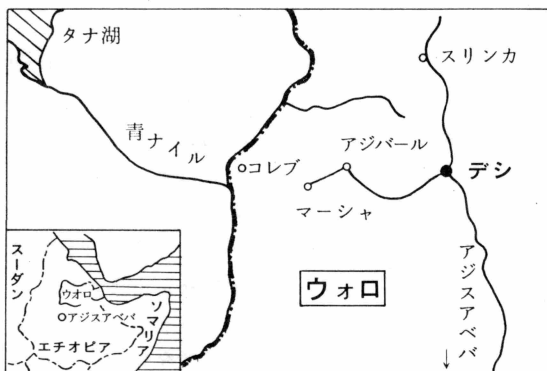
期 間：8月17～29日(2泊3日の事前研修あり)

募集人員：10名

参加費用：約18万円

募集受付：4月20日より募集人員に達するまで

* タイのツアーはMIRC(モラロジー国際救援運動推進委員会)とのジョイント・プログラムとして行われます。お申し込みはMIRC(0471-73-3216)かJVCの岩崎が受け付けます。



* 詳しい日程が決まりましたら本誌の誌上でお知らせいたします。なお参加費用のなかにはパスポート、ビザ、及び保険料は含まれていません。(担当 林)

エチオピア・スタディーツアー

	訪 問 地	活 動 内 容
第1日		事前研修
第2日	成田→北京	出発(中国民航)
第3日	北京→アジスアベバ	到着 JVC オフィス訪問 マルカート見学
第4日	アジスアベバ→デシ	移動, 途中の村の見学
第5日	デシ→マーシャ村	"
第6日	マーシャ村	プロジェクト見学 植林手伝い, スタッフとの交流会
第7日	"	植林など作業手伝い 周辺の村を訪問
第8日	マーシャ村→アジスアベバ	移 動 アジスアベバ病院跡地見学
第9日	アジスアベバ→北京	移 動 アジスアベバ市内見学 (温泉に入る)
第10日	北京	午前中自由行動 午後の便で北京へ
第11日	北京→成田	北京市内見学
第12日		帰 国

現地NGOとの交流を重ねる

アジア民間交流ぐるーぷ
(APEX)

主婦や学生、あるいは今までの仕事をやめてNGO活動に参加、という人が多いなかで、アジア民間交流ぐるーぷ(APEX)を支えているのは、主に40歳前後の中堅サラリーマンである。昼間は会社、夜はAPEXと2足のわらじを履く。

APEXの前身は第三世界セミナーとよばれていた勉強会で、APEXの代表である田中直さんと、彼を囲む志を同じくするスタッフたちによって運営されていた。

この第三世界セミナーは、82年以来、コンピューター、近代化、エネルギー等の問題を系統的に追ってきた『連続ゼミナール』(2回/年)で、第三世界の問題をとりあげた際に講師のひとりとして招かれた鶴見良行さんが産みの親。「勉強だけではなく、実際に自分の足で歩いてみなさい」この一言が第三世界セミナーの名の下にスタディーツアーを組むきっかけとなった。83年冬のことである。

初めてのスタディーツアーは84年の夏。84年、85年と主に東北タイの農村を訪れた。この時の経験によってただ旅をするだけでなく、実際に何かの活動に参加したいと次第に思うようになった。86年の訪問先はあまり日本のNGOが足をふみいれていないインドネシアに的を絞り、継続的に交流、協力できるNGOを探した。このツアーでスラムの人々を対象にローコスト・ハウジングや生業創出等に悪戦苦闘しているYABAKAという、ジャワ島中部スマラン市で活動している小さなNGOと出会い、交流の端緒をつかんだ。これを機会にグループの名前も第三世界セミナーからAPEXに変え、第三世界、とりわけ東南アジアの人々とさらに深く係わっていこうとする姿勢を明確にした。

87年よりスタディーツアーの性格もYABAKA訪問という色彩が強くなり、“第三世界を知る”という初心者向けのツアーとはいえなくなってきた。またAPEX創設以来、インドネシアツアーと併行して行っているタイツアーの目的も自ずとYABAKAのようなNGOを探することに絞られてきた。

しかし困難は山積みしている。APEXの身の丈にあった“ナイーブで小さなNGO”と交流したいと考え、初回ツアー以来のタイの友人たちの伝を頼りに東北

タイの村を訪れたところ、その村の開発方法をめぐるタイの大NGO同士の目に見えない本質的な確執に危うく巻き込まれそうになったり、これは、と思った中部タイのNGOが、てっとり早く現金収入が得られる都会に若者が去ったため、さびれる一方であったりと、こちらの思惑とのすれちがいをしばしば経験した。またインドネシアチームも、日本に招待したYABAKAメンバーが生業創出・環境保全に役立つのではと、廃プラスチック加工に強い興味を示したので技術面・資金面での支援を開始し、その進み具合やいかにと訪ねたところ、地元の有力者を紹介され、彼の工場の技術援助を求められて困惑するはめになったり、YABAKAの事業拡大に伴い、APEXとYABAKAの間、さらにはYABAKA内部がぎくしゃくしたりなど、双方の思い入れのずれや、仕事や生き方等に関する根本的な彼我の相違に、ひとつひとつ直面させられていた。

いままAPEX内では、「継続して援助できる十分な資金力の未だない自分たちが第三世界のNGOをサポートしようとするのははた迷惑なことではないか、自分たちは対等に交流したいといっても彼らにとっては“趣味”と映るのではないか、これでいいのか」と、白熱した論議がくり返されている。

たしかに現実には厳しい。時には「善意」さえはねつけられることがある。しかし、交流を開始したからには、YABAKAがノーと言わない限り、何と少しでも末永い関係を継続させることが、いわば最低限の社会的責務であると、「分別盛り」のサラリーマン主体で構成されているAPEXは、考えている。

APEXの第三世界とのかかわりは緒についたばかりだ。しかしYABAKAとの交流、タイのNGO探しの旅を通じ、とおりの旅では知ることのできないアジアの現実に触れることができたようだ。

今年の夏もまた、カウンターパートを求める旅となることであろう。そこには新たな発見が待っているに違いない。



開発教育としての重みを感じる

曹洞宗ボランティア会
(SVA)

NGOのスタディーツアーといえば1年に1～2回、会員を中心に公募して行われるのが一般的だ。特にまとまった休みのとれる7～8月に集中している。しかし、ここに紹介する曹洞宗ボランティア会はちょっと違っている。主体は地域の支援グループや支部で、東京本部は持ちこまれた企画や要望をチェックし、現地との調整を計る役目なのだ。今年度は計6回ツアーが行われた。

6月 山口支部 15名

8月 静岡東部支部が企画 「一本百円の苗木を植える会」 11名

11月 茨城教育援助基金を支える会 7名

11月 SVA私設応援団(スタディーツアーOB) 5名

12月 静岡ボランティア協会、静岡リパティライオンズクラブ主催 高校生など 12名

2月 長野県ボランティアOB 若手僧侶 6名

など実に多種多様である。以前は公募していたこともあったが、地域のグループからの要望が多く、そちらの方までなかなか手がまわらないというのが現状だ。それにしても現場のあるNGOが年6回もツアーを出すというのは並大抵のことではない。そのへんのところを事務局長代行の八木沢克昌さんに伺ってみると、

「初めは開発教育というよりも国内活動の活性化をねらっていました。しかし回を重ねる度にスタディーツアーの重要性を感じるようになってきたのです。日本社会のゆがみとか、誰が加害者で誰が被害者かは日本にいてはわかりません。自分たちの意識改革こそ重要なのではないのかと、今では開発教育としての視点の方が強いですね。

参加者の中には地域での活動をしている人も大ぜいいます。地域だけでは見えなかったものがタイに行くことによって見えることがあるんですね。大きく考えて小さく行動するということでしょうか。まず向こうの厳しい現実を知る。異文化を知る。そしてタイの人の持っている、人間と時間、人間と自然、人間と人間の間を学んでいきます。日本の教育に行き詰まりを感じていた人もタイの人の考えを学ぶうちに自分たちの問題解決のヒントを見つけること

もあります。

それから海外に関心のある人のなかには身のまわりのことには気がつかない人もいますが、異文化への理解とは海外だけを指すのではないと思います。国内でもわからないこともあるし、違う考えを持った人を理解するということが必要でしょう。海外に愛を運ぶのはそんなに難しいことではないかもしれませんが。近くにいる人のことも考える。そちらの方も見落としてはならないと思います」。

ボランティア会ではこの12月、高校生のスタディーツアーに同行した。ここ数年若い人の間にアジアへの関心が高まっているが、このツアーには93人も応募があった。彼らはスタディーツアーを通してどのように変わっていったのだろうか。

まず彼らは自分たちの幼さを指摘している。スラムに暮らす同年代の少年たちは家族を養うために働いている。スラムの生活を向上させるための活動もしている。自分は勉強ができと思っていたが、勉強しか知らない、と。彼らは勉強はたくさんしているが、人間と人間の間を真剣に考えたことがなかった。だからミーティングなどで自分の意見を求められたのはつらかったようだ。しかしそのなかで、タイと日本の関係、自分自身のことがわかってくる。ある女生徒は「日本がタイを食べている」と表現した。また別の1人は「タイに行く前のすべてをわかりきったような口調ですばらしい意見を述べていた自分よりも、まだ言葉には表せないけれど、さまざまな体験を心で悩みながら整理しようとしている今の自分の方が人間らしいかな」と感想を述べている。

初めてタイを訪れた人は、その体験も新鮮なかわり、時としてその視点が実際と違うことがある。しかし八木沢さんはあえてそのことに対し訂正しないという。高校生たちが旅を続ける過程で変わっていったように、初めから答を押しつけず、いっしょに考えていきたいと。

年齢差のある高校生との旅に不安を感じた八木沢さんも、今回のツアーで自信を得たようだ。今後もボランティア会としてはこのようなツアーに積極的に参加していきたいと思っている。

スタディーツアーを通じてJVCの活動を支援

JVCの現場を訪ねるMIRC（モラロジー国際救援運動推進委員会）のスタディーツアーも今年の2月で12回目を迎える。1983年から年2回ずつ行っているこの事業も6年目を迎え、“タイ・スタ”は恒例行事としてすっかりMIRCの活動の一部となっている。

モラロジーとJVCのかかわりは1980年にさかのぼる。モラロジーの青年部がインドシナ難民救援のための募金活動を行ったり、ボランティアの派遣をJVCを通じて行ったのがはじまりだ。1982年からはインドシナ難民に限らず、途上国の人々を救援するためにMIRCとして改組し、以来協力関係が続いている。今回はJVCの活動のよき理解者であるMIRC事務局の奥山恵俊さんと、第10回スタディーツアーの団長である松本彰夫さんに、MIRCのスタディーツアーの方針、実際に参加された感想などをお聞きした。

〔奥山〕

MIRCでは、当初からJVCにボランティアを派遣し、彼らの帰国報告会等を通じ、国内における難民問題の啓蒙活動を行ってきました。ただそれだけでは数に限りがあります。またボランティアに行きたいが、時間の都合で無理だという問い合わせも多く、何かいい方法はないかと考えました。そこで一度試験的に“タイ・スタ”を試み、その後試行錯誤を繰り返しながら、現在に至っています。

現地を視察する視点は二つあります。一つはMIRCが支援しているJVCの現場を視察し、今後の援助のあり方を探るということです。視察内容もタイ東北

の農村とバンコク市内のスラム、国境と難民キャンプというように、問題発生の原因を理解しながら、現場を見るという視点で組まれています。

そしてもう一つが、現地でボランティアとして働く人たちとの話し合いを通じ、その精神を学び、息吹を日本国内の活動で引き継ごうというものです。

既に“タイ・スタ”OBは80名を越え、みんな各地でがんばっています。

MIRCのスタディーツアーはJVCとジョイントで行われる。参加者はMIRCとJVCでそれぞれ公募され、その内分けは相談して決める。現地での案内は

JVCが受け持つが、団長はMIRCが務める。それでは第10回のスタディーツアーの団長の松本さんにお話を伺ってみると……。

〔松本〕

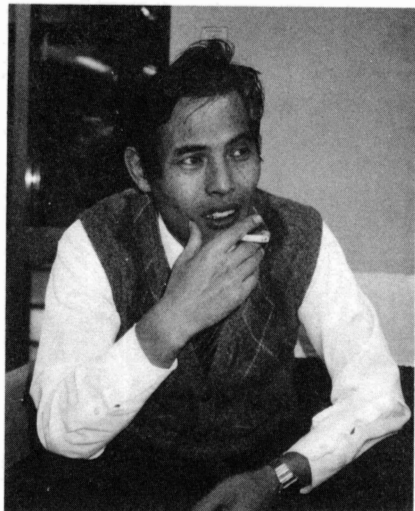
本当言うとな、その時にもう1つ計画されていたアメリカのツアーの方に went かったんですよ（笑）。でも帰ってきたら無意識のうちに、タイやカンブチアへ関心が向いちゃって。麗澤大学※にはいろいろな国から留学生も来ていますから話はしていましたが、さら



第10回スタディーツアー。誰が日本人かわかる？

に海外への関心が高まったとか、手当たりしだいあっちこっちでタイの現状の話をするようになりました。参加した人にね、言うんですよ。語り部になれて。

報告会は強要されていないが、体験したことは語らずにいらなくなる。自発的に報告会を設ける人、「募金箱を送ってくれ」とMIRCに依頼してくる人、帰国後の活動が次の参加者に結びつく。



松本彰夫さん



奥山恵俊さん

〔松本〕

理屈ではわかってるんですけどね、やはり実際に行ってみないと。うちの子供に、「タイでは上等の食事だぞ」とか「タイの子供はみんな働いているよ」とか言うのと、それなりに関心を持っているみたいです。

なんといっても一番感動したのは農村の生活体験です。動きが止まってしまったとか、自分の子供のころでもあんなことはなかったですから。スラムの生活は自分たちの子供時代を思い出しました。参加者の中から「あれ、川崎といっしょだ」という声が上がりましたが、なつかしい感じがしました。

難民キャンプも印象的でした。足のない人が手作りの車イスに乗っているんですね。戦争の現実と、その中でも必死に生きている人々に感動を覚えしました。

スタディーツアーから帰ると報告書をそれぞれ作ることになっている。第10回の報告書はすべて松本さんの手作りで、ワープロ入力、印刷、製本まで一人でやってのけたという代物である。旅への思いがこめられている。そのうえ松本さんはツアーに備え、タイ語のハンドブックまで作ってしまった。ポケットに入れて汗をかいてもボロボロにならないように、ビニールでコーティングして。スタディーツアーのたびにタイ大好き人間が生まれているようだ。

MIRCから支援を受けたJVCの給水プロジェクトはタイ農村からカンプチア国内と、もう8年も続い

ている。今後スタディーツアーでカンプチアを訪問する計画はないか伺いしてみた。

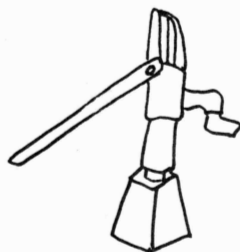
〔奥山〕

年2回の“タイ・スタ”は定着していますので、カンプチアは今後の状況を見ながらそれとは別に考えることになりますね。私たちとしては現場を持っているJVCのような団体と今後も関わっていきたいと思っています。タイの難民キャンプはしだいに閉鎖されていく方向にあります。タイと日本の関係はますますクローズアップされてきていますし、“タイ・スタ”は訪問先は変わっても続けたいと思います。

MIRC(モラロジー国際救援運動推進委員会=Morality International Relief Committee)

1926年廣池千九郎によって創立されたモラロジー（道徳科学）研究所を母体とする救援組織。これまでにインドシナ難民、エチオピア干ばつ被災民、あるいはアルメニア大地震などの緊急救援をはじめ、JVC、シャプラニール等のNGOの諸事業に対して、人道的立場から支援し、世界平和、人類の安心と幸福の増進に寄与することをめざしている。

※モラロジーに基づく学校教育を行っている。





〔特選〕

祭りの少女(タイ)

撮影 清水俊弘

祭りの日。

着飾った少女たちの
行列が続く。

少女を中心に、
左右の人間の配置を
計算に入れた構図が
良い。少女の表情も
あどけなくて感が良
い

石川文洋

〔入選〕

1. 泉(ラオス)

撮影 前田初江

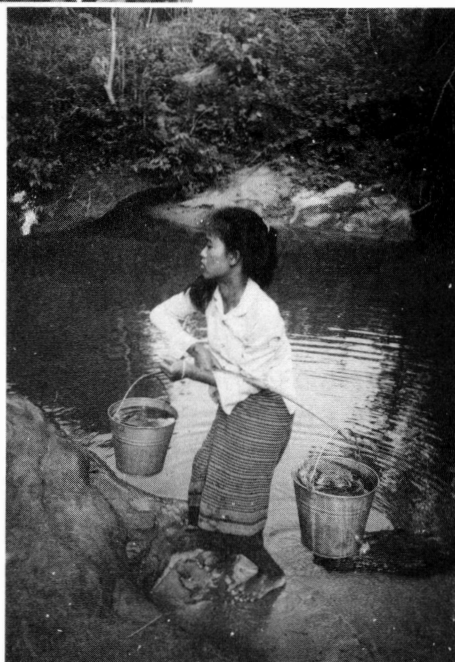
水汲みは娘さんの役目。

日本でも少し前まではこんな
光景が見られた。

水を汲んでいる娘の自然な
からだの動きがうまくとらえら
れている。カラーのバランス
がとても良いがモノクロで印
刷されるのが残念だ

石川文洋

1



2



2. スラムの屋下がり

(バングラディッシュ)

撮影 穂坂光彦

子豚にえさをやる子供たち

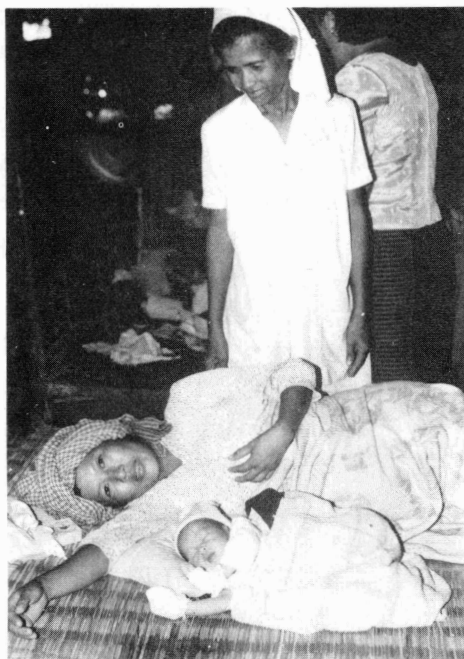
世界にはいろいろな条件のも
とで、いろいろな人が生活を
している。この写真からは子
供のたくましさを感じられる

石川文洋



〔佳作〕

1. カトマンズ郊外（ネパール）
撮影 穂坂光彦
2. メグナ川へ食器を洗いに来た女性（バングラディッシュ）
撮影 前田初江
3. 山岳民族の少女（タイ）
撮影 大石道子



〔特別賞〕 新しい生命^{いのち}

（カンプチア）

撮影 古西 勇

JVCのラインセンターで生まれたばかりの赤ん坊とその母親。

〔この写真は執行委員の方の一番強い支持を受けました〕

今回のフォトコンテストは初めてということもあり、広報がゆき渡らなかったため写真を送って下さった方々が限られてしまった。また、テーマはA. 第三世界の人々、B. JVCの活動現場であったが、Bに特選、入選に該当する写真がなく、今回は見送らせていただいた。

なお、次回も同じテーマでフォトコンテストを行います。締め切りは12月末、皆様からの作品をお待ちしています。

誰のために

何が必要で何が不必要なのか

受話器をとると、聞きたくもない声が飛びこんできた。「元気か？ タンザニアで何を始めるんだ？ ちょっと話す時間はあるか？」UNHCRタンザニアの現場担当者、F氏である。かつて私がソマリアで活動していたとき、彼はUNHCR職員としてソマリアにいた。つねに本部のご機嫌とりをしていた彼は、現場にいながら、現場に身を投じようとしなかった。難民や地元民と日々格闘していたNGOの者にとつては、実に嫌な存在であった。

彼は待ち合わせ場所にほどなく現われた。相変わらず聞きとりにくい英語でまくしたててくる。自分が担当しているプロジェクトがとても順調だとか、そのために今度は本部に移されるかもしれないとか、話す内容も相変わらずである。自分の足元を見ずに、しゃにむに上へ上へと昇りたがる性格は一向に変わっていなかった。実は彼と会う前日、彼の上司からそのプロジェクトには問題があると聞かされていた。

そのプロジェクトとは、タンザニアに流入した難民の「自立促進」をめざすプロジェクトであった。

難民たちは、農業経験があり自立心が旺盛なため、外部からの大規模な援助がなくても、自主的に農業を始めた。気候や土壌の好条件も手伝って、2年もたたないうちに自立の目安がたったその矢先、難問がもちあがった。自主的に定住した難民たちを各地から集め難民村を建設し、あわせて、その村を管轄する行政センターや病院などを建てたいとタンザニア政府が言ってきたのだ。UNHCRの資金でこれが実行されたが、それらの施設の多くは、活用されないまま、今も野ざらしになっていると言う。

いったい、その援助は誰のために行なわれたのだろうか。自主的に定住し、それぞれの村で自立しかけていた難民たちが1カ所に集まる必要はなかったろう。当然、立派な行政センターや病院がうまく機能するはずがない。

しかし私たちは、この事業を対岸の火として傍観できない。NGOでも犯しがちなことである。私たちの活動の対象者が誰なのか、まず私たちは自覚しなければならない。彼らの声に耳を傾け、彼らのニーズ（必要性）を把握する。そして、そのニーズの妥当性を十分検討したうえで、活動すべきである。もちろん、活動しないという結論もありえる。

「誰のために？ 何が必要？ 何が不必要？」と、つねに自分に問いかけるのを忘れないようにしたい。

清くも貧しくもないボランティア

“ボランティア”と日本で言えば、“タダで奉仕する者”とか、“清く、貧しい者”と思う人が大勢を占めている。しかしこの捉え方は、ボランティアの本質を歪曲してしまったように思う。ただ結果として、その傾向が生まれただけである。

日本では、ボランティアとして活動しても、生産的な活動とはなかなか認めてもらえない。したがって、当然お金にはならない。もちろん、“庶民はお上に滅私奉公すべし”という、歴史的な背景もある。今でも、“ボランティアは安く使える人材”と考えている行政組織は少なくない。この行政組織の姿勢は明らかに間違っている。何もボランティアは、行政組織の“お助けマン”ではなし、補完的な役割を担うものでもない。余談になるが、行政組織もまた、かつて“公僕”と言われたように、本来はボランティアであるべきなのである。

ところでJVCでは、専従者のほとんどがお金をもらっている。私自身、それがやましい行為とは思っ

ていない。そして、その給料が少ないとはいえ、特に自分が貧しいと思っている者は少ないようだ。またJVCの活動者のなかに、「自分は清い」などと豪語する者はいないし、そう思っている者もほとんどいないであろう。

では、“ボランティア”の原点は何だったのだろうか。私は、“既存の行動原理や行動パターンにしばられず、自発的かつ自律的に何かをする者”を、ボランティアと呼びたい。つまり、人に命令されたからでもなく、かといって、勝手気ままに振る舞うのもない人である。

JVCでは、単に便宜上、お金をもらっている者を“スタッフ”、もらっていない者を“ボランティア”と分けている。しかし、上記の意味において、本来どちらでもボランティアである。そして私は、他のNGOでもボランティアが中核で活躍するのが望ましいように思う。もしもそうでなければ、NGOも単なる職能集団か、有閑者集団になってしまう。

つねに私たちは、“ボランティア”とは何かを問いつづけ、持ちつづけたいものである。（鶴田三芳）

プノンペン雑感

古西 勇

(カンプチアチーム)

見慣れない光景にふと足を止めた。犬が首をヒモでつながれ散歩していた。ここはカンプチアの首都プノンペンである。都会で犬を飼っている人がいれば散歩させるのも当たり前だろうという人もいるかもしれない。しかし、少なくとも私の経験では、この3年間に一度も見たことがない光景であった。これだけでは富を持つ人が出てきたとはいえないかもしれないが、私には、それがこれからこの国が歩むであろう歴史を象徴する光景に思えた。

3年近く前にここに来た時、人々は様に貧しさを耐えているかのように見えた。今こうしてみると、富を持つ人がだんだんと増えてきたように思う。社会があり、経済活動が行われていれば、富を持つ人とそうでない人がいるのは当たり前のことである。3年近く前、初めてここへ来た時それに気づかなかったのは、私の未熟な観察力ゆえか、あるいはその時はまだ富を持つ人はほんの一部でしかなかったからなのか……。

この2、3年で市内に小ぎれいなレストランが雨後のたけのこのようにできた。この国ではレストランほど盛衰の激しい商売はあるまい。最近ではテレビでレストランのコマーシャル番組をやっていて、宣伝合戦が盛んである。しかし、客は味につられてついてくるようで、調理人の引き抜きがあちこちで見られる。

レストランとしては老舗であるリパティという店で夕食をとっていたら、以前この店に来た時のことを思い出した。店の外にはまるで浮浪者のような人たちが数人いた。どうやらベトナムから流れてきた母親と子供のような様子だった。彼らは、私たちが食事を終えて席から立ち上がるやいなや、電光のようにすばやく店内にとびこんできて、食べ残しの食物をとっていった。あれは2年ぐらい前だったかと思うが、今はそのような人は目につかない。

それと同じ頃、戦争で足を失くした人々が街を杖をついて歩いているのが、痛ましいほど多く見られたものだった。数日前、私たちが買い物をしていると、後ろから人の近づく気配がし、「ソム、ピー、リエル」(2リエル下さい)という声がした。声のする方を見ると、足を失くし杖で身体を支えている人

が2人いて、そのうちの1人が連れの分も含めて2リエル(約2円)を求めたらしい。店の主人は顔色も変えずにさっとお金を差し出した。しかし、以前に比べれば、そういう人たちの姿を目にするのは非常に少なくなっている。

先ほどレストランの数が増えたと書いたが、そこで出てくる料理は主に中華料理である。家庭では食べることができない料理を出すのがレストランだとすれば、カンプチア人のためにカンプチア料理のレストランがないのもうなづける。また、日本の中華料理店の多さや中華料理の家庭への浸透ぶりを考えれば、料理に国境はないといって納得できるかもしれない。

そこで考えさせられたのは、この国における中国人の存在である。ある日簗田さんおすすめの店でラーメンを食べた。オルセ市場に面した通りのあまりきれいではないところである。店の主人は注文をとると何語だかわからない言葉で、おそらく「ラーメン3丁ノ」(3丁ノ)というような意味のかけ声を屋台の調理人にかけていた。「クメール語を話しますか?」とクメール語で聞いてもニコニコ笑っているだけで、どうも中国人らしい。そこで手のひらに「潮州」と書いてみせると、彼ははし立てのはしと一緒に差し込んである紙切れをとって「広東」と書いてくれた。

昔からこの国ではベトナム人とチャム人(イスラム教徒)は全然同化せずに残っており、容易に判別できたといわれる。しかし、中国人はカンプチアの生活に溶けこんでおり、混血は非常に多かったらしい。また、中国人は自分たちの文化に自信を持っていたので、国籍はあまり気にしなかったといわれる。この国の経済に対する彼らの影響は計り知れない。経済を安定させることに必死の政府にしてみれば、彼らは経済活動の上で同じ土俵に乗っているようなものであろう。彼らとどう取り組むかはこの国の政府にとって大きな課題である。

今回東京からこちらに赴任してもう4週間が過ぎた。悠長に構えていて仕事をしていないじゃないかと叱られそうぐらい、こちらの生活には馴染んだと思う。これからは自分なりに目標を持って活動を進めていきたい。

天への カエルの申し立て

今回もまた天空を舞台にした民話で、日本にある有名な御伽話を思い出させる話です。ベトナムでは最後に笑わせて自然界についての説明でしめくくり、日本では勸善懲惡の仇討ちの話になりました。がらりと筋立ては変わっていますが、話の名人が次々と作り変えていくなかでも、聞き手が思わずひざを打つような部分が改変を免れるのでしょう。(村田広平)

むかし、むかしのことで、時代も年号もはっきりしないが、長い長いかんばつで畑はひび割れ、草木は枯れて、葉はすっかり落ちつくし、動物たちは飲み水を求めてさまよっていた。

蛙はもうだめだと思い、天の庭に行き天帝に訴えようと考えた。少し行くと蛙はかになに出会った。かには、どこへ行くのかと聞いた。蛙が事情を話すと、かには蛙にいっしょに連れていってくれるよう頼んだ。つぎの森につくと、こんどは熊と虎に出会った。熊も虎も渇きに耐えられず、あとは死を待つばかりだった。蛙とかにがいっしょに歩いているのを見て、熊と虎はわけを聞いた。蛙は、

「われわれはまもなく干上って死んでしまう。どうなっているのか天に聞きに行くんだ。君たちもいっしょにいかないか」

熊と虎は声をそろえて言った。

「われわれも行きます。みんな運命をともにしましょう」

しばらくすると、こんどは蜂と狐に出会った。彼らもいっしょに連れていってくれるよう頼んだ。彼らは連れ立って天の庭に行った。天の庭の門につくと、そこにある大きな太鼓を見て、蛙は、

「かにさん、あなたは水がめに入り、蜂さん、あなたは扉に隠れなさい。狐さん、熊さん、虎さん、しばらく後ろに控えていて下さい」

みんなを配置してから、蛙は一人で進み出して、ばちを取って三回ほど太鼓をたたいた。天帝はびっくりぎょうてんして、天雷にわけを調べるように命じた。天雷はあたりを見回したが、小さいほ蛙の

ほかはだれもいない。天雷はもどって天帝に伝えた。天帝はすっかり怒って、その無礼な蛙をつっつかせるため、にわとりを放すよう命じた。にわとりが飛んでくると、蛙はうしろに隠れている狐に合図を送った。狐はにわとりの首をくわえて連れさった。天帝はますます怒り、狐をかみ殺すよう犬に命じた。犬が出てくるとすぐ蛙は熊に合図を送り、熊は飛び出して犬をなげ殺した。そのことが天帝に伝えられると天帝は熊を罰するよう、天雷に命じた。天雷は大きな刀をひさげ肩をいからせて外に出た。しかし手を出さないうちに天雷は扉に隠れていた蜂にさされた。天雷は水がめに逃げこんだが、こんどは中にいるかにははさまれ、悲鳴をあげて飛び出してしまった。天雷がうろたえてまごまごしていると、虎が襲いかかり彼を引きさいた。

天帝は困りきって彼らと仲なおりをしなければならなくなり、蛙を天の庭に迎え入れた。蛙は訴えた。

「天帝様、もう四年間、下界にはひとしずくの雨も降りません。地上は乾ききっています。この状態が長く続くと、生き物はことごとく死に絶えるでしょう」

天帝は下界が大混乱になることを恐れて、おもむろに言った。

「お帰りなさい。私が雨を降らせるようにしましょう」

そして言い足した。

「これからは、下界の干ばつが長く続いたら、君は歯ざしりして私に教えなさい」

言いおわると天帝は龍に雨を降らすよう命じた。蛙たちが下界に帰りつくと水が畑にあふれていた。そのときから蛙が歯ざしりすると、しばらくして必ず雨がふるようになった。

民間にこういう歌がある。

— 蛙は天のおじさんであり、蛙を打つものは天に罰される。(同朋舎『ベトナムの昔話』より)



JVCプロジェクト

1989年1月25日 現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計，総務，情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 毎月第2，3土曜日 午後2時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 星野昌子（事務局長） 熊岡路矢，林 達雄，前川昌代，鶴田三芳，加藤志保，富安光子，岩崎美佐子，アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内における渉外，事業計画，情報収集，資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画，運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション。		山口誠史，
日本国内	●定住難民プロジェクト 3月26日に老人ホーム「さくら苑」と合同で年度末のパーティを開くことが決まり，現在準備中。当日はカンブチア，ラオスの伝統舞踊，インドシナ料理の試食なども行う予定。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金，「国際交流ボスピタリティトラスト」，日本少林寺拳法連盟特別養護老人ホーム「さくら苑」	山口誠史，他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと，毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助（コレブを中心に） 1000mm近い降雨量を記録した大雨期が終り，収穫期を迎えている。雨による作柄への被害は避けがたいが，農民に笑顔と誇りが戻ってきた。1年4カ月に及ぶJVCの緊急食糧配給は11月に最終ラウンドを終え緊急事態は一応の終息を見た。 ●総合的復興促進（マーシャ） 1. 植林，土壤保全 7月中に山間部の土壤保全の植林を終え，その後，村人たちに苗木を配り各家庭に植えてもらっている。 2. 母子保健・栄養 家庭菜園，離乳食等の訪問形式による指導が母親自身の手で行われつつある。 3. 給水 清潔な飲料水確保のため，泉の保護をしている。種子銀行，農業教室も引き続き行っている。 ●道路補修 豪雨により傷められたアンバマリアム—マーシャ間の道路補修を12月に終えた。	CRDA，WFP，犬養道子・みどり一本運動，日本少林寺拳法連盟，モラロジーMIRC，東京グリーン・ウォーク，西本願寺，ジャパン・タイムス，チャリティ・サイクル，Tree for lifeの会，中部善意銀行	鈴木直喜，山田 盛，伊藤達男，伊藤幸子，イエットベルク，ソロモン，パレタ，ダニエル，エシャトー，トーマス，シュクール

活 動 地 名	活 動 内 容	支 援 団 体	担 当 者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	毎年のこととはいえ、厳しい季節を迎えつつある。1月ごろから徐々に上昇しはじめる気温は4月の雨季直前でピークに達する。地表温度が70℃を超えるのも珍しくない。現にこの厳しい環境と過労のため、金子がマラリラで倒れ、現在ナイロビで治療、休養中である。今月上旬、JVCソマリアの年次総会がルークで開かれた。昨年行った活動の自己評価と今年の計画などについてつっこんだ話し合いが持たれた。 また、前号でお知らせした“UNHCRの方針表明”についてUNHCRとソマリア政府との交渉が進展し、政府がUNHCRの方針に基本的に合意したようである。	UNHCR, 仏国土をつくろう会	金子一弘, モハメット・アブディ, ムハボ, 中野周二, 磯田厚子, 羽田尚由, モハメッド, シアッド, アオキ, アブドラーヒ, アブディナサル, ヒレ, アブディカリム, シュクリ
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 約40haの農場が完成し、これに刺激された他のグループ(難民と地元民)がJVCに協力を依頼してきたが、これは断った。このグループは政府の高官と近い関係にあり、将来問題を起こすかもしれないからだ。	R.I.-Japan 創価学会青年平話会議	ラシッド
カンブチア カンボット県 プノンペン カンダール県	●サンタビエツ技術学校／ワークショップ 現在までに、3台のトラックのエンジン・オーバーホールを終えた。中程度や簡単なオーバーホールを合わせると、合計60台以上のトラックを修理したことになる。技術学校では9月から第2期の研修が始まり、孤児院からも2名の者が参加した。自動車労連より寄贈されたフォークリフトが到着した。次回の6カ月コースのカリキュラムが完成した。 ●井戸掘り 農業省水利局の井戸掘りチームは、9月12日から井戸を掘り始めた。ワークショップ用の2本の井戸、トゥルタボン寺小学校の井戸はすでに完成した。プノンペン郡で2本の井戸を完成したあと、カンボット県で20本の井戸掘り活動を行う。 ●RINE(ライン)プログラム〔母子保健活動〕 ラインセンターの建物は10月3日に落成した。落成に合わせて、日本からJVCとSHAREの代表団が現地視察を行った。日本の病院より寄贈された光学顕微鏡が、保健省母子保健局に届けられた。各郡から32名が参加した年4回の保健スタッフ訓練が完了した。 JVC技術学校の交換部品購入資金などの支援を求めるキャンペーンを実施中です。資金不足のため建設が中断していたカンダール・ストウン郡小学校完成のための80万円カンパは四日市商業高校、モラロジ・MIRCの御協力で全額集まりました。建設を再開しました。ありがとうございました。	創価学会青年平和会議, モラロジ・MIRC, 立正佼成会, 日産労連, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会, 覚法寺, 「チャリティ・ウオークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 毎日新聞大阪社会事業団, 大竹財団, 東京都社会福祉協議会, 国際ソロプチミスト千代田, 明るい社会づくり運動神奈川県協議会, 浄土宗東京地区青年会, 和平基金, 国際保健協力市民の会(SHARE) 仏教救援センター, 四日市商業高校, 日蓮宗宗務院, 横浜市「世界ふれあいキャンペーン」, 「お告げのフランシスコ姉妹会」, 日本海事センター, 中部善意銀行, 堺市ロータリークラブ	養田健一, 養田玲子, 馬 清, 釘村千夜子, 古西 勇, [カウンター・パート] (運輸省) タック・カン, アム・ディエン, メアス・サメット, ゲット・ソーン, カム・ボラ (保健省) アン・サルン医師 (カンダール県保健局) ニム・ニエム医師 (農業省水利局) セン・ロー

活 動 地 名	活 動 内 容	支 援 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④日本人主婦ボランティアとの連絡調整 ⑤季刊「ニューズレター」（英語、タイ語）の発行 ・12月25～31日、タイ南部の水害地を実地調査。 ・1月4日、UNHCRとの会議に出席。 ・南部水害地に古着及び日本からの義援金による救援物資を配布した。	全国社会福祉協議会	ポンピモン・チャンブーン、カモン・ミンムアン、スennie・テイチャリヤクン 熊沢ゆり チャタヴァデ・モンコン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 一気筒エンジン、単車、自動車、電気の理論と演習の各コース、溶接コース、大作業所のプログラムを実施。 現在400人の生徒が技術習得に励んでいる。今年度から新たに竹細工、漁網、水くみポンプの各コースを開設する。現在それぞれのコースのために新しい指導者を養成中。教室などの施設は準備完了した。	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム、清水俊弘、大石道子
バナニコム (第三国定住待ち キャンプ)	●日本語学校 ・日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育 ②日本文化、習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ・他国定住予定者へのプログラム 渡航準備オリエンテーション 1月16日から日本行きのベトナム難民4人が日本語の勉強を始めた。 同日から午後の1時間を“日本の生活紹介”にあてる。具体的な日本の文化、生活習慣をテーマに紹介。 日本語学校の生徒数 < ラオス29人、カンブチア58人、ベトナム4人	天理教千葉 R.I. - Japan	鈴木由子、竹村雅義、アナン・ブダミリンパティープ
地域開発 (バンコク市内の スラム地区) (ブリラム県の M村)	●奨学金プロジェクト 1月14日の「子供の日」に、クロントイ1、2、3区の高速道路下の広場で子供会活動を行った。 ●スラム生活改善プロジェクト 立ち退きの予定されるスラムで住民の組織作りを行っている。 ●農村開発 ブリラム県M村で、学校給食の自給自足を目指すプロジェクトを行っている。 ●その他 1月9日から13日までピッサヌローク県を訪問し、植林プロジェクトのための調査、ミーティングを行った。	モラロジーMIRC JOFIC, We Love Asia Tree for Life の会 雄勝町町内寺院会 国際ソロプチミスト駿河 長谷川勉チャリティーウォーク	ワティット・チャンスリャオン、サムルアイ・ジョンヨークラン、リーラ・クンナロン、コメン・スンスマン 今泉 恵、 ガームシン・ロンクン
ラオス (ヴィエンチャン)	●生活改善指導員養成プロジェクト 母子保健、幼児教育、家政一般、農業等の基礎知識・技術の普及を通して農村地域の復興と自立を促がす。ヴィエンチャンに上記の知識・技術を教えるセンターを作り、地方の婦人を対象に生活改善指導員を養成する。 現在はヴィエンチャンで保健省、教育省、農業省の協力の下にラオス婦人連合と共同で養成コースのカリキュラムを作成している。養成コースは89年3月から始まり、89年末以降指導員の農村での普及活動を多面的に支援する。	庭野平和財団 難民と地球の緑を考える会 「チャリティ・ウォークかながわ」 スコティッシュ・ナイト・イン・専修寺 聖ヨゼフ老人ホーム	谷山博史、前田初江

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (1月小計 102,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (1月小計 645,027円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (1月小計 25,500円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (1月小計 35,290円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (1月小計 67,500円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (1月小計 759,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (1月小計 126,000円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (1月小計 23,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (1月小計 51,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (1月小計 80,000円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (1月小計 369,514円)

編集後記

▶ある席で「NGOの関係者は第三世界についてはっきりものを言わないことがある。彼らの文化、習慣の中には明らかに近代化を妨げているものがある」という発言があった。ここで近代化とは何かという難しい議論はさておくとして、たしかに「悪いことは言わない」という不文律があるような気がする。もしも対等な関係の友人だったら「悪いことは悪い」と言うだろう。そして「まったくしょうがないな」と言いつつもつきあっていくだろう。独善を恐れるあまり謙虚になりすぎているのだろうか。それともいまだに第三世界の人々と本当の信頼関係が築かれていないのだろうか。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
加入者名—JVC 東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (1月小計 606,132円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

1989年2月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 FAX:03(835)0519
Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川国際交流協会内 ☎045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。